

巻頭言

生物機能開発研究所は、応用生物学部開設に先立って設立され、この18年間、バイオテクノロジー研究の拠点として研究者間の相互交流を推進するとともに、様々なプロジェクト研究を支援してきた。近年は設立当時と比べて大学全体の教員、職員数や学生数も2倍近くなり、大学の組織や運営が変化するにつれて研究所に求められる役割も変わってきている。

この流れを受けて2017年度は、大学の指導のもとにこれまでの研究所の研究支援のあり方を見直すことになった。昨年度までは毎年、プロジェクト研究として4つから5つの研究課題を生物機能開発研究所運営委員会が選んで支援していたが、今年度はこれを1つに絞って助成し、さらに1年だった研究期間も2年間に延長した。この新システムになって最初に選ばれたプロジェクト研究である「エクトインによる真核生物ストレス耐性機構の解明と新たな産業利用基盤の展開」について、本紀要には中間報告を掲載したが、世界に先駆けて真核微生物中からエクトインを検出するなどすでに興味深い成果が得られており、2年目に向けてさらなる研究の発展を期待したい。また今年度初めての試みとして、研究の進展と大学院生への支援を兼ねて大学院生特別研究補佐員制度を創った。本紀要にも大学院生特別研究補佐員による研究報告を掲載した。これまで申請が博士課程の大学院生に限られていた大学内の研究助成制度に、修士課程の大学院生が応募可能な枠が創設されるなど、中部大学全体でも大学卒業後、積極的に進学を支援しようという機運がこれまでに無く高まっているように思われる。まだできたばかりのしくみであるため、今後、見直しや改善を進めて、大学院の充実と研究の発展に、より貢献できる制度に育てることも必要であろう。

本紀要はバイオテクノロジーおよびバイオサイエンス分野のオリジナル論文を掲載するオープンアクセスジャーナルであり、昨年度より本紀要の総説、解説、報文、短報および調査報告はすべて査読を行った後に掲載されている。本紀要がバイオサイエンス、バイオテクノロジーに関する読者の興味を満たし、新たな研究の端緒となれば幸いである。本号にご執筆くださった皆様に加え、審査員として本紀要の査読に御協力いただいた諸先生方ならびに本紀要の編纂に御尽力くださった米澤編集委員と禹編集委員長に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

平成30年3月

生物機能開発研究所
所長 大西素子